

葉山町立葉山中学校

研究テーマ：9年間を見通した探究的な学びの実現を目指して
～実践を通して、自ら学び、考え、行動できる生徒の育成～

1 実践の目的

(1) 研究の背景と本校の課題認識

本研究は、「総合的な学習の時間における探究的な学び」をテーマに据え、3年間にわたる継続的な研究と実践を経て、その成果を今一度振り返る過程のものである。

グローバル化やAI技術の進化など、予測困難な現代社会において、自ら課題を見つけ、他者と協働しながら解決策を見出し、実践していく力は、社会の担い手となる生徒にとって不可欠な資質能力である。この力を育成する有効な手段こそが「探究的な学び」であるという認識のもと、本校では「スクールポリシー（自ら学び・考え・行動できる人）の実現」に向け、探究的な学びを研究の軸としてきた。

3年間を通じた教職員の意識的な実践により、「探究的な学び」の具体的な姿や、その実践において重要な「生徒が前のめりになる課題設定」「教員も楽しむ学習内容」「資質・能力の伸長」「好奇心を起点とした学習活動」といった4つの要点が明確になった。

本研究の目的は、これまでの成果を継続・発展させ、特に本校の特長である「地域・外部との連携」「仮説の設定と検証」「実践（プロトタイプ）」の3点を核とし「探究的な学びの姿」を確立することにある。

(2) 具体的な目標

特に今年度は、東京学芸大学との継続的な連携のもと、昨年度の反省点である「プロトタイプに対する検証」までを組み込み、探

究のサイクルを完結させる指導モデルを構築する。これにより、生徒の「自ら学び、考え、行動できる力」を最大限に伸ばし、9年間の義務教育を見通した一貫性のある「探究的な学び」を葉山中学校に定着させることを最終目標としている。

2 実践の内容

本校の探究的な学びを具現化するため、以下の3点を特徴的な活動の柱とし、東京学芸大学との連携や地域の人材の活用を織り交ぜながら実践を展開した。

(1) 研究の基盤と外部連携の活用

東京学芸大学の金子嘉宏教授の助言を定期的に受けながら、「ありたい姿（ビジョン）」を描いたのちに現状とのギャップを特定し、それを探究課題として学びを構成する手法を導入した。また、葉山小学校ともこの手法を共有し、9年間を見通した「探究的な学び」における、共通言語化を図った。

(2) 葉山中らしさを核とした探究プロセスの展開

地域・外部との連携

教室内の学びに留まらず、地域住民、専門家、企業等へのインタビューやフィールドワーク等を全ての学年で実施した。社会のリアルな課題に触れながら、多様な価値観に接する場を意図的に設定することで学習意欲の向上や地域参画への意識の向上に努めた。

仮説の設定と検証

情報を集めるだけでなく、「こうすれば解決するのではないか」という独自の仮説を立て、アンケート調査や聞き取りを通じてその有効性を確かめるステップを重視した。**実践（プロトタイプ）**

アイデアを形（プロトタイプ）にして提示し、他者からのフィードバックを得て修正を繰り返す活動を取り入れた。昨年度の反省を生かし、単なる「成果物の制作（スライドを用いた発表形式）」で終わらせず、その後の改善（検証）に時間を割くよう授業設計を工夫した。

(3) 教員のファシリテーターとしての役割

各活動の中で、生徒たちの話し合い活動を教員が俯瞰し、「教える」ではなく、「一緒に考える」を大切に声掛けを意識した。伴走者（ファシリテーター）の在り方についても、東京学芸大学はもちろん、その他企業からも支援を受けながら、「探究的な学び」における「教師の在り方」について模索した。

3 実践の成果と課題

(1) 実践の成果（生徒・教員の変容）

生徒の変容

「まずやってみる」というプロトタイプ思考が浸透したことで、失敗を恐れずに試行錯誤を楽しむ姿が見られるようになった。地域連携を通じて「自分たちの学びが社会の役に立つ」という実感（自己有用感）が高まり、スクールポリシーである「自ら学び、考え、行動できる」姿勢を体現するきっかけをつくれたように思う。

教員の変容

探究的な学びの4つの要点（生徒にとって前のめりな課題設定、教員も楽しむ、資質・能力の伸長、好奇心の起点）が共通認識となり、各学年で創意工夫のある授業が展開された。特に、伴走者（ファシリテーター）

としての関わり方を考えるきっかけをつくることができ、今後の学習成果の向上に期待ができる。

小中一貫教育の深化と連携基盤の確立

本年度、葉山小学校と探究の軸を共有したことで、義務教育9年間を見通した組織的な連携が飛躍的に進展した。

第一に、教職員間で「探究的な学び」に対する共通言語が形成されたことが挙げられる。総合的な学習の時間の活動について、校種を越えて同じ目線で語り合えるようになったことで、教師間のコミュニケーションが極めて円滑になった。この密な連携は、総合的な学習の時間の枠に留まらず、各教科における指導の接続や共有など、多角的な連携を図るための強固な土台となることだろう。

第二に、指導の専門性が向上した点である。共通のフォーマットを用いた単元構想案の作成に取り組む中で、児童・生徒の「発達段階に応じた探究内容」を検討する明確な視座が確立された。小学校での好奇心溢れる活動を、中学校でいかに社会的な検証へと繋げるかという、系統的な指導プロセスの構築が可能となった。

第三に、探究のサイクルの共有である。「地域連携・仮説検証・プロトタイプ」という葉山らしいスタイルを小学校段階から意識的に取り入れようとしたことは、生徒にとって学びの連続性を実感させる大きな要因となると思う。これにより、中学校入学時に戸惑うことなく、自立的に探究を深めていける「学びの一貫性」の素地が整いつつあるのではないかと。

(2) 今後の課題

検証プロセスの深化

プロトタイプの実践までは活発に行われるようになったが、得られたフィードバッ

クを論理的に分析し、さらに精度の高い「最終的な解決策」へと昇華させる検証の質にはまだ課題が残る。

評価のあり方

生徒が発揮した資質・能力を、単なる活動評価に留めず、評価者が教科横断的な視点で「生徒が各教科で獲得した資質・能力をどのような場面で、どのように発揮できていたか」を見取り、適切なフィードバックをすることが重要である。日ごろの教科学習はもちろん、総合的な学習の時間における活動を価値づけることのできる評価システムの検討が必要である。

全教職員の共通理解の継続

人事異動等がある中で、社会の変化等を的確に捉えながら、これまでの研究で見えてきた、葉山中独自の探究スタイルをどのように継続していくか検討しなければならない。

4 今後の展開

(1) 研究の持続可能な体制構築（「実践」から「文化」へ）

本研究を通じて確立されつつある「葉山中スタイル（地域連携・仮説検証・プロトタイプ）」を、単なる研究活動の一環ではなく、本校の教育課程における「日常的な学びの姿」へと昇華させることが次の段階ではないかと考えている。教職員の異動等による組織の変化に左右されず、スクールポリシー「自ら学び、考え、行動できる人」を具現化し続けるため、これまで実践して積み重ねてきたことを基盤にしながら、今後も行政や外部機関と緊密に連携をとりながら、取り組めるとよい。

(2) 探究の質のさらなる高度化

今後の課題として残された「検証プロセスの深化」については、生徒自身がデータの

妥当性を検討したり、多角的なフィードバックを論理的に分析したりする力の育成に教科横断的な視点をもって取り組んでいく必要がある。

また、東京学芸大学との連携を継続し、専門的で先鋭的な知見を取り入れながら、生徒の「ありたい姿（ビジョン）」をより高い次元で社会的な課題と接続させるような学習のテーマ設定ができるとうよい。

(3) 義務教育9年間を見通した「学びの地図」の完成

数年前から掲げている小中一貫教育に関する、葉山小学校を中心とした各小学校との連携を少しずつ加速させていきたい。小学校での「好奇心を原動力とした探究」を大切に引き継ぎつつ、中学校ではステップアップした「探究的な学び」をデザインできると良い。そのためにも、今後も小学校と継続的に合同研修会を開催し、9年間の一貫した「探究的な学び」のあり方を模索していきたい。

地域・保護者に対しても、生徒が地域社会をフィールドに試行錯誤する姿を、行政主催のシンポジウムや学校だより等を用いて積極的に発信し、本校の教育活動への理解と共感をさらに深めていきたい。本校の探究活動は、地域の皆様の多大な協力があって初めて成り立つものである。生徒たちが地域のために考え、行動する姿が、結果として協力してくださった方々への「恩返し」となるような、そんな学びの姿を目指したい。「地域の協力」と「地域への貢献」が循環するような仕組みができ、地域人材が学校教育へ主体的に参画し、学校・家庭・地域が一体となって生徒を育てるとともに、生徒の活動が地域の活力にもつながっていくような、学校と地域が共に成長し続けられる町づくりに、本校の研究を役立てていければよい。